

学位論文 「メルロ＝ポンティの政治哲学」 概要書

金田耕一

## 序章

モーリス・メルロ＝ポンティ(Maurice Merleau-Ponty, 1908-1961)は、二〇世紀を代表する哲学者の一人である。フッサールの現象学を継承しながらも「現象学をその限界にまで導いた」と言われる彼の哲学は、豊饒な可能性を秘めた鉱脈として今なお多くの哲学研究者の探索対象となっている。また、彼が切り拓いた現象学と人文・社会諸科学の対話領域は、哲学以外の研究者をも魅了してやまない。その一方で、メルロ＝ポンティは、政治状況に積極的に関与したアンガジュマンの哲学者としても知られている。彼は、それまで漠然としたものでしかなかった「参加」(engagement)の理念に具体的な政治的表現を与えた人物であり、実質的に実存主義的政治の最初の構想者であった。しかしこれまでにその哲学に高い評価が与えられているのに比べて、彼の政治哲学の意義が十分に認知されてきたとは言いがたい。

メルロ＝ポンティは、政治哲学を主題とした体系的著作を残していない。政治をめぐる彼の考察は、もっぱらその鋭利で奥行きのあるマルクス主義論によって知られている。かくして、サルトルがマルクス主義へと移行したと相俟って、一般に実存主義的政治哲学はマルクス主義との関係においてしか成立しえないかのように考えられてきた。実際、多くの研究がメルロ＝ポンティの政治哲学を彼のマルクス主義論を中心にして捉えようとしている。しかし、このような研究視角には重大な問題がある。第一に、メルロ＝ポンティの政治哲学と彼のマルクス主義論とがあらかじめ同一視されているために、彼の哲学とマルクス主義的な政治哲学の内的連関が十分に検討されないことである。すなわち、メルロ＝ポンティの哲学から言って、マルクス主義的立場を選択したことが、どの程度まで必然的な帰結であったのか明らかになっていないのである。第二に、マルクス主義を放棄して以後のメルロ＝ポンティが、一切の政治的関心を失って哲学の世界へと撤退したという結論を導きかねないことである。そうであるとすれば、メルロ＝ポンティは、マルクス主義を選びとる以外には、彼自身の哲学に固有の政治哲学をもちえなかったことになるだろう。この研究視角は、そもそも実存主義には固有の「政治哲学」が存在しえない、という根本的批判に道を開くことになるのである。

たとえば、アーレントは、フランス実存主義の政治が「ニヒリスティックな状況からの政治的救済」を求める「行動の哲学」に基づいており、政治的選択に方向性を与えたり、政治原理を定式化することを可能にするいかなる「政治哲学」も実存主義には期待しえない、と論じている。そして、サルトルとメルロ＝ポンティがマルクス主義的立場を選択し、カミュやマルローがそれに対立する立場を選択したことを例に挙げて、「行動の領域内部では、それが革命的変革を約束しているかぎりあらゆるものが完全に恣意的なもの」である以上、なんら驚くべきことではないと述べる。またアドルノは、

実存主義に、客観性を放擲した主観性哲学の決断主義的帰結しか見ていない。実存主義がその強い政治的関心にもかかわらず、せいぜいのところ決断主義的な「行動の哲学」を提出したにすぎないという見方は、多くの研究者が共有するところではないだろうか。

本書の最大の課題は、マルクス主義のうちに溶解する政治哲学でも、また原理なき「行動の哲学」でもない、「メルロ＝ポンティの政治哲学」を描き出すことである。そのために本書では、次のような研究視角をとった。

第一に、本書では、読解の水準を、当時の政治的状況への応答として書かれたメルロ＝ポンティの政治的見解の水準ではなく、あくまでも彼の状況分析と判断の基盤となっている政治哲学の水準においている。つまり、本書は、読解の対象をメルロ＝ポンティの政治的テキスト（政治評論、論説、発言）に限定せず、むしろ、彼の哲学的テキストに潜む政治哲学的思考を明らかにしようと努めた。また、政治的テキストを読解する場合にも、そこに表明された彼の政治的見解を検討するよりも、むしろそうした見解を生み出した政治哲学を掘り起こそうと努めた。このような読解によって、体系的に叙述されているわけではないメルロ＝ポンティの政治哲学を再構成しようとしたのである。したがって第二に、本書では、メルロ＝ポンティのテキストの政治的社会的コンテクストについては必要最小限触れるにとどめ、むしろ哲学的コンテクストを重視した。つまりメルロ＝ポンティの政治哲学に影響を与えたと思われる思想を取り上げ、彼がそれらの思想をいかに読解し、それらといかなる対話をおこなったのかに注意を払ったのである。

本書の研究の結果、実存主義の政治哲学が現代の政治的思考にとって有する意義が確認されるはずである。

## 第一章 政治と実存

本章では、まずメルロ＝ポンティの最初の政治論文である「戦争は起こった」("La Guerre a eu lieu," 1945)を素材として、その政治哲学の基本的発想を確認する。次に、『知覚の現象学』(*Phénoménologie de la perception*, 1945)序文と「ヘーゲルの実存主義」("L'Existentialisme chez Hegel," 1946)を相互連関的に解釈し、メルロ＝ポンティの「実存的現象学」が、実存的解釈によるフッサール現象学とヘーゲル現象学の接合によって、歴史的実存の哲学を構想したものであることを論じる。

### 1 歴史の発見

「戦争は起こった」は、メルロ＝ポンティの〈政治参加〉のマニフェストとも言えるべき論文である。開戦前夜から解放にいたる一連の経験の分析の上に、政治参加の論理を構築しようとしたこの論文に、われわれは彼の政治哲学の基礎的視角を見ることができる。その意味でこの論文はメルロ＝ポンティ

の政治哲学「序説」とも言うべき位置を占めているのである。メルロ＝ポンティは、戦争と占領の経験によって、みずからを根底的に自由な存在であると信じ込んでいた素朴な意識が、みずからが他者と共に歴史的状況に位置づけられた存在であることを学んだのだと述べている。歴史という共通の場においては、私の自由は他者の自由に依存しており、またそこには絶対に非合理で情念的な要素が宿る。こうしたことを、意識は知ったのである。かくして戦前の、自由で理性的個人によって構成された予定調和的社会という社会認識の幻想性が明らかになる。そして、歴史的状況の論理と偶然性に揺れ動かされながら、他者との闘争のなかでみずからの自由を獲得してゆく、という現実主義的な社会認識への転換がなされたのである。メルロ＝ポンティの政治哲学の出発点には、このような「歴史」を直視しえなかった戦間期フランスの哲学と政治に対する批判的視座がある。それは、良き意志に基づく理性的判断のうちに自由の精神を見たアランの政治哲学と、科学的認識の歴史のうちに永遠の理性の発達を見たブランシュヴィックの新カント主義哲学である。メルロ＝ポンティの哲学的課題は、人間を意識として捉える主知主義と、人間を物として捉える経験論との間で、身体をそなえた意識という人間存在の特殊なあり方を解明することであった。それはまた、歴史に位置づけられた人間の具体的生を解明するという社会的・歴史的関心によって貫かれていたのである。こうしてメルロ＝ポンティは、二つの「現象学」へと向かうことになるのである。

## 2 「われわれにとっての現象学」

周知のようにメルロ＝ポンティの哲学は、フッサール現象学の「生活世界」論を継承したものである。しかし彼は、あくまでも具体的な生を解明しうる「具体的な哲学」を求めて、フッサール現象学に大胆な改鋳を加えることも辞さなかった。『知覚の現象学』序文は、後期フッサール現象学になおも繼いづく超越論的観念論を徹底的に払拭することによって、現象学が「実存の哲学」へと移行する必然性と正当性を論じたものである。メルロ＝ポンティにとって現象学とは、世界への一切の内属から解放されて世界を構成する孤独な意識へと立ち戻るのではなく、事物や他者に巻き込まれた《われ》、自然的状況と歴史的状況に位置づけられた主体である「世界内存在」(être-au-monde) ないし「実存」(existence)のあり方を解明する努力である。メルロ＝ポンティはこのような現象学を、世界の意味の能動的構成から受動的発生へと主題を移行したフッサールの「発生的現象学」の構想のうちに見ている。ここにおいて現象学は単に対象の本質の「知解」を越えて、対象が含む豊饒な生の意味の「了解」へと向かうことになる。とりわけ重要なことは、ここでメルロ＝ポンティが現象学的探究の主題となるべき実存の様式をヘーゲル的な「理念」として捉え返していることである。かくしてメルロ＝ポンティの現象学の構想は、フッサール現象学を突き破ってヘーゲル現象学へと送り返されることになるのである。

### 3 ヘーゲルの「現象学」

メルロ＝ポンティは、一九三〇年代フランスのヘーゲル・ルネッサンスから多大な影響を受けている。ヘーゲル哲学を主題とした論文「ヘーゲルにおける実存主義」は『知覚の現象学』序文と呼応するかのように、フッサールとヘーゲルの現象学を二つの極として、そこに実存的探究を位置づけるような思想的空間を設定している。メルロ＝ポンティにとってヘーゲル『精神現象学』は、思想や時代をその内的論理に即して記述し、人間的経験に内在する論理を明らかにしようとする哲学である。しかも彼は、「絶対知」でさえも哲学の完成ではなく、自分自身を了解しようと努める実存の一表現であると主張する。このようにしてメルロ＝ポンティは、フッサールが素描したにすぎない「発生的現象学」の原型的試みとして『精神現象学』を読解し、またそこに「原実存主義者」ヘーゲルを見出す。「ヘーゲルの実存主義」という視点からメルロ＝ポンティの実存的現象学を照射することによって、その構想がより明瞭なものとなる。彼の実存的現象学は、人間を、その生成のうちに歴史を孕んだ実存であると同時にみずからの歴史を創り出す実存として発見する、歴史の実存の哲学なのである。

## 第二章 他者と自由

本章では、『知覚の現象学』の他者論と自由論を解釈する。他者と自由の問題こそが、彼の哲学と政治哲学とを繋ぎとめているからである。またここでは、サルトルの〈相剋〉と〈存在論的自由〉の観念に対する批判の意義を明らかにすることによって、メルロ＝ポンティが構想する歴史の実存の哲学が、サルトルの実存主義を乗り越えて、ヘーゲルの実存主義を現代的完成にもたらそうとしたものであることが論じられる。

### 1 サルトル哲学批判の位相

メルロ＝ポンティは、サルトルの思想的同伴者であったというよりは、むしろ「批判的同伴者」という両義的な立場にあった。このことは、サルトルの『存在と無』を論じた論文「実存主義論争」("La Querelle de l'Existentialisme," 1945) に如実に現われている。この論文でメルロ＝ポンティは、『存在と無』が経験論と観念論の対立を「実存」の観念を援用することによって乗り越えようとしている点で高く評価しながらも、それが、みずからを状況へと参加させようと決意する自由な意識であることと、参加せる意識は状況に拘束された行動においてしかみずからを実現しえないこと、という「意識と行動のパラドクス」を解明しえていないと批判する。そしてそれを解明するためには、「受動性の理論」と「社会的なもののあり方と共存の現象」の分析が必要であると指摘しているのである。これこそ、メルロ＝ポンティが『知覚の現象学』で提出したものであった。ここに、みずからの実存的現象学をもってサルトルの実存主義を乗り越えたというメルロ＝ポンティの自負を窺うことができ

る。問題は、「受動性の理論」と「社会的なもののあり方と共存の現象」の分析によって可能となる歴史的実存の哲学の射程を明らかにすることである。

## 2 共存と相剋

メルロ＝ポンティは、意識としての存在と物としての存在、無と存在との間に引かれたあまりに厳格な分割線ゆえに、サルトルの存在論は、身体をそなえた意識、意識であると同時に身体でもある人間の特殊なあり方を捉えきれていないと論難する。他者について言えば、サルトルは、私と他者との根源的關係を、相互に相手を即自へと転落せしめるべく対象化の「まなざし」を向け合う意識の「相剋」(conflit)と見る。これに対してメルロ＝ポンティは、根源的關係を、相互主観的世界を基盤として、身体的実存の二つの極である私と他者とが交流する「共存」(coexistence)として提出する。しかしながら、メルロ＝ポンティはあらゆる人間関係を〈共存〉に還元しているわけではないし、また〈相剋〉の現象を否定しているわけではない。むしろそれを「生きられる独我論」(solipsisme vécu)と名付け、私の存在の根本的条件としての主観性を基盤として現実には生きられている現象であることを認めている。問題は、主観性の現象を否定することではなく、主観性の概念を再検討することである。

## 3 社会的なものの理論

メルロ＝ポンティにとって〈共存〉と〈相剋〉は相互排他的な二項ではない。むしろ両者の関係は現象学的な「基づけ」(Funderung)の関係にある。〈共存〉と〈相剋〉とは両義的な現象であり、しかもこの両義性は決定的には乗り越えられないものなのである。かくして主観性の経験の基底には相互主観性の経験が、個別的な意識的実存の基底には身体的実存が、〈相剋〉の基底には〈共存〉が見出される。この身体的次元における相互主観的生は、まだ〈われわれ〉という人称をもっておらず、それゆえ未反省のまま生きられている潜在的で暗黙的生でしかない。しかしそれは、個人的生のまさに核心にあって個人を包囲しひそかに動機づけている。すなわち、実存はその根源的次元において〈社会的なもの〉に貫かれているのである。私はつねに意味の絶対的源泉であろうとする。しかしすでに私は集団的意味が所与のものとなっている世界に内属しており、それは私の生の基底を絶えず流れている。〈社会的なもの〉とは、個人的生を他者の生へと結びつける絆であり、共通の状況へのわれわれの暗黙の参加にはかならない。さらに、他者と共存可能な主体にとってのみ歴史が可能となるのであり、〈社会的なもの〉こそ歴史哲学の可能性の条件である。

## 4 状況づけられた自由

近代哲学における自由の概念は、あらゆる事実性を排した「無世界的自由」(liberté acosmique)を認める絶対的自由論と、人間行動を物理的・生理的・社会的環境の結果として因果的に説明する決定

論の対立のなかにある。メルロ＝ポンティは、世界への内属と超越という人間のきわめて特殊なあり方を解明するには、実存の概念を援用するほかないと主張する。このような人間存在の特殊なあり方は、『行動の構造』(La structure du comportement, 1942)において、人間行動の特性をめぐる考察によって明らかにされている。すなわち一般に有機体の行動とは、状況からの刺激に対して生起する反応ではなく、物理的および生物的自然を容受して自己に固有の環境へと換える活動である。ただし人間は、みずから創出した環境に埋没するわけではない。人間に固有の能力は、所与の構造を越えてつねに新たな構造を創出してゆく能力である。このような人間的行動の特性を、メルロ＝ポンティは、ヘーゲルの意味での「労働」(travail)として捉える。ここにメルロ＝ポンティの自由の概念の存在論的根拠を見ることが出来る。しかしこの自由に基づく人間的弁証法は、あくまでもわれわれの状況への内属を前提にしているものであり、所与の状況を乗り越える自由は、決して人間をその状況への内属から切り離すものではない。この意味で、自由は「状況づけられた自由」である。

## 5 受動性の理論

人間を超越によって即自を存在せしめる存在として規定し、世界の定立を意識の無化作用に基づけるサルトルにあっては、世界を意味たらしめるものは意識の自由＝個人的投企以外のなにものでもない。しかし、「受肉した実存」である身体と世界との交流によって、世界は意識の能動的意味作用に先立って構造化＝意味化されている。私の意志的投企はこの「世界の土着の意味」(sense autochtone du monde)をとりあげ直し、それを基盤にして遂行されるにすぎない。「世界の土着の意味」は、共通の身体的構造をとおして他者との共存のなかで形成される意味であると同時に、また過去の投企の沈殿作用をつうじて形成された意味でもある。私の自由は、このような社会的で歴史的意味が底流となっている状況に支えられている。もしそうでないとすれば、自由は瞬間瞬間のうちに一切を無から創造する能力となり、あまりにも普遍的であるかゆえに空虚なものになってしまう。逆に「状況づけられた自由」であればこそ、自由は具体的行動となりえ、自由な投企が一つの状況となって結実することも可能となる。そしてまた、個人的投企や決意が可能になるばかりではなく、共通の状況のなかで私の自由と他者の自由とが媒介されて集団的投企も可能となるのである。

## 6 歴史の実存の哲学

「ヘーゲルの実存主義」においてメルロ＝ポンティは、ヘーゲルの「生命の意識」と「自己意識の闘争」をそれぞれのハイデッガーの「死の意識」およびサルトルの「相対の意識」という実存の様式に読み換えている。与えられた特殊な存在の否定として普遍的意識である「死の意識」は、抽象的普遍と具体的生との対立に囚われた「非本来の意識」と、死を引き受けることによって抽象的普遍を具体化する「本来の意識」とに区別される。この死の本来の意識に私を近づけてくれるのは、ただ他者

経験のみである。私は他の私を否定することをつうじて普遍的生命の統一としての自己を見い出そうとする。かくして純粋な対自存在であろうとする意識は、他の意識との〈相剋〉のなかで、純粋な「否定性」として実存するのである。しかしメルロ＝ポンティは、サルトルが〈相剋〉をその本来的意識にまで高めておらず、私と他者、対自と対他との矛盾が癒しかたいまま放置されていると指摘する。これに対してメルロ＝ポンティは、ヘーゲルの「主人と奴隷の弁証法」に依拠しつつ、〈相剋〉を〈共存〉によって基づけ、〈自由〉を〈労働〉によって規定する。メルロ＝ポンティの実存的現象学においては、「相剋の意識」が徹底化されることによって他者の否定が他者の肯定へと変えられ、また「死の意識」が徹底化されることによって死はより高次の生へと移しかえられる。それはもはや「死の意識」や「相剋の意識」によって規定される個人的実存ではなく、おのれに与えられた諸規定を引き受けながら、みずからの歴史を創造することによって所与の状況乗り越える主体である歴史の実存である。この意味でメルロ＝ポンティは、自分自身の実存的現象学をヘーゲルの実存主義の現代的完成として構想しているのである。

### 第三章 暴力とヒューマニズム

本章は、『ヒューマニズムとテロル』(*Humanisme et terreur*, 1947)を、政治評論ではなく政治哲学として読み解くことを目指す。まず彼の〈共存〉と〈状況づけられた自由〉が〈暴力〉と〈ヒューマニズム〉へと変換されてゆく論理を辿る。次に、メルロ＝ポンティの自由主義批判を、政治に現象学的還元を加える「政治の現象学」として再構成する。またここから導出される具体的ヒューマニズムの政治の可能性を、「マキアヴェリ覚書」("Note sur Machiavel," 1949)に見る。最後に、このような具体的ヒューマニズムの政治が要求する厳しい政治的行為と責任の論理を、読み取ることに努める。

#### 1 『ヒューマニズムとテロル』の位相

『知覚の現象学』は〈共存〉と〈相剋〉の両義性を決定的に乗り越えることは不可能であると認めるが、〈相剋〉の具体的形態についてはほとんど語っていない。また自由があくまでも〈状況づけられた自由〉であることを強調しながら、この自由の能力を支えとしつつ新たな状況へと所与の状況を超出する意志的投企としての自由についてはなんら具体的な説明を与えていない。『ヒューマニズムとテロル』は、他者との〈共存〉から〈相剋〉へと移行した主体が、所与の状況乗り越える自由を歴史的实践の具体的論理として跡付けることを目的としたものである。この意味で、それは『知覚の現象学』の続編として読むことができる。すなわち『ヒューマニズムとテロル』は、歴史の実存の哲学の政治哲学的表現なのである。



## 2 闘争と労働

メルロ＝ポンティが提出した〈共存〉は〈相闘〉を否定するものではなく、むしろ〈相闘〉に基づけるものであった。しかし〈相闘〉は〈共存〉に基づけられることによって、永遠に承認に達することのない相互対象化の関係から、ヘーゲル的な「闘争」へと転化する。この〈闘争〉は、身体をそなえた意識が同一の状況を生きる他者を巻き添えにしながら、すなわち《われわれ》という社会的存在がいま一つの《われわれ》とのあいだに繰り広げる暴力的関係である。その結果として〈闘争〉は一方的承認関係へといたる。つまり、二つの集団のあいだの支配と服従、具体的な暴力として歴史の現実には登場するのである。人間は、状況の意味を取り上げながら新たな状況を創出する自由である〈労働〉によってこの〈暴力〉を乗り越え、〈ヒューマニズム〉の実現へと向かうだろう。かくして知覚的世界における〈共存〉と〈状況づけられた自由〉は、『精神現象学』の自己意識論における〈闘争〉と〈労働〉の論理を媒介として、歴史的世界における〈暴力〉と〈ヒューマニズム〉の課題へと変換されることになるのである。

## 3 具体的ヒューマニズムの課題

政治の日常においては制度の下に覆い隠されているものの、あらゆる政治の根源には暴力が不可避に存在する。しかし、制度の自明性が失われたとき、ふたたび各人の自由は死をもって他者を脅かすことになる。メルロ＝ポンティの政治的思考の端緒となるのは、政治生活に現象学的還元を加えることによって明らかになった、政治の根源に不可避に存在する暴力を直視することである。しかし人間社会を「理性的人間の共同体」と見なす自由主義は、この暴力を直視することができない。自由主義政治は、ただ暴力への非難を繰り返すだけで暴力を具体的に乗り越える行動にはなりえない政治である。メルロ＝ポンティは、道徳に訴えかける政治をカント的政治(*politique kantienne*)であると非難する。そのヒューマニズムは形式的であり、それが尊重する諸価値は抽象的なものでしかない。世界は本質的に合理的なものであり、人間的諸価値を実現するための諸条件がすでに与えられていると考えるがゆえに、この政治には諸価値を現実のものにする社会構造と現実的關係を確立するような「具体的ヒューマニズム」の課題を担うことができないからである。それは政治というよりは道徳でしかないのである。

## 4 マキアヴェリ政治

「マキアヴェリ覚書」のなかで、メルロ＝ポンティは、マキアヴェリの「徳能」(*virtù*)にカント的「道徳」とは対照的な政治に固有の徳(*vertu politique*)を見出している。本質的に合理的なものでも予定調和的なものでもない世界において、根源的な人間関係は闘争でしかないし、また、この闘争を道徳的勧告によって乗り越えることもできない。マキアヴェリが道徳主義を非難するのは、それが単

なる自己満足でしかないような意図や善意に基づく政治へと帰結するからである。マキアヴェリは、根源的な闘争を越えて人間的諸価値を実現しようような現実的諸条件を樹立することを政治に求める。マキアヴェリが求める権力は、単に合法的であるだけでなく人々の暗黙の同意によって支えられた権力である。それは、人々の自由の能力に訴えかけることによって、彼らを共通の状況へと参加させ、闘争関係でしかない集団生活を共同生活へと変える。マキアヴェリの「徳能」とは、このような「歴史的営み」としての政治を構想する能力にほかならない。マキアヴェリの政治のうちに、メルロ＝ポンティは、具体的ヒューマンイズムの条件の定式化を見出しているのである。

## 5 政治と歴史的責任

『ヒューマンイズムとテロル』におけるモスクワ裁判の分析をつうじてメルロ＝ポンティが明らかにしようとするのは、歴史的実践としての政治的行為に課せられた厳しい歴史的責任の論理である。モスクワ裁判において裁かれたのは、政治的人間がおこなった政治的選択とその歴史的帰結であった。ここで問題となるのは意図ではなくあくまでもその帰結であり、それゆえに、政治的人間の悲劇というべきものが生じる。このようなメルロ＝ポンティの論理の根底にあるのは、歴史は未完結であり偶然性を孕んでいるという歴史観である。歴史の未完結性は人間の自由の能力の裏面でもあるのだが、それは、政治的行為を著しい緊張のなかに置くことになる。しかしこの政治的行為の論理と倫理を受容しえない政治は、永遠に小児的政治世界から脱することができない政治である。しかしまた、歴史の未完結性と偶然性という観念は、メルロ＝ポンティの政治哲学がいわゆる「決断主義」に帰結するという批判を招くことになる。

## 第四章 実存主義的マルクス主義

本章では、メルロ＝ポンティの実存主義的マルクス主義を検討する。まず、彼がマルクス主義を実存的現象学の政治的表現として読み替えてゆく過程をたどる。次に、メルロ＝ポンティの実存主義的歴史観とマルクス主義歴史哲学の齟齬を、彼の歴史の両義性という観念のうちに探る。最後に、彼がプロレタリア社会の実現のうちに人間の問題の究極的解決を見る黙示録的歴史へと移行したことの問題性を指摘する。

### 1 実存主義とマルクス主義

一九四〇年代のメルロ＝ポンティは、マキアヴェリ的政治の現代の継承者をマルクス主義政治に見ていた。戦後数年間に精力的に発表された一連の政治・哲学論文は、実存主義とマルクス主義とを統合する、いわゆる「実存主義的マルクス主義」の試みによって貫かれている。メルロ＝ポンティからすれば、マルクスとキルケゴールのヘーゲル批判は、哲学体系にその歴史的内属と具体性を取り戻せ

という批判的要求の別様の表現でしかない。このようにマルクス主義と実存主義をヘーゲル哲学の抽象性に対する批判において結びつけることは、それらを具体性から離れることのなかった『精神現象学』のヘーゲルと結びつけることでもある。メルロ＝ポンティにとって、マルクス主義とは『精神現象学』をその具体的帰結にまで推し進めたものにほかならない。それは「自己意識の闘争」から「主人と奴隷の弁証法」へと転化する社会的実体の内的運動としての「神話的闘争」に具体的な歴史的名称を与えたものである。かくしてメルロ＝ポンティが析出した暴力とヒューマニズムの弁証法にもまた、マルクス主義的名称が与えられることになるのである。

## 2 史的唯物論の実存的解釈

メルロ＝ポンティは、史的唯物論を『行動の構造』と『知覚の現象学』において展開した行動と知覚の哲学に即して理解しようとしている。マルクスが言う「自然」とは、人間的活動＝実践の所産としての自然であって、人間がみずからの行動の枠組として即自的自然から切り取ってきた「環境」にほかならない。それゆえ、弁証法とは、自然的社会的状況に位置づけられた人間が、共存の具体的様式としての生産様式をつうじて、所与の状況に働きかけることによって新たな状況をつくりだす「人間的弁証法」であり、歴史的实践の定式にほかならない。また史的唯物論は歴史を経済によって説明する因果論的説明ではない。歴史の基礎となるのは社会的実存の歴史であって、史的唯物論とは、さまざまな事象からなる生きられる経験の歴史を、経済も文化をも切り離すことなく理解しようとする全体論的な理解の試みなのである。しかし身体と世界との交流のなかで誕生した意味が理念的意味の基礎となるように、経済生活は他の文化的現象を動機づける具体的構造である。経済とは「歴史の身体」なのである。しかし、マルクス主義的弁証法をあくまでも歴史の実存の弁証法として捉える以上、歴史はつねに偶然性と非合理性の経験に晒されており、それゆえ「革命」もまた必然でも約束されたものでもありえない。実存主義とマルクス主義の統合の試みは、歴史の必然性という観念をめぐって深刻な問題に直面するのである。

## 3 歴史の両義性

メルロ＝ポンティは、歴史の全体的意味を誤解し、歴史の論理を把握していると主張するようなマルクス主義政治を、歴史的独断論として拒否する。しかしその一方では、偶然事の連続である歴史にはいかなる意味＝論理もなく、したがって、歴史的实践を基礎づけるような歴史の誤解はありえないとする歴史的不可知論をも拒否する。それらはいずれも、人間が行動によってみずからの歴史を創るという人間的弁証法を成立しえなくするからである。メルロ＝ポンティにとって歴史とは、論理＝意味と偶然＝無意味とが交錯する両義的な場である。彼は歴史の可知性と方向性を歴史の論理の二つのエレメントとして捉え直すことによって、歴史の論理を、偶然性とたえず交錯しながら浮かび上がる

ような意味として描き出す。すなわち、偶然性を同化しつつ目的へと接近する過程、それぞれの時代の意味の全体性がある特権的意味の全体性へと推移する過程として、歴史を捉えるのである。言うなればそれは、歴史を必然へといたらしめることのない一種の歴史の目的論である。

#### 4 歴史の目的論

知覚における対象が状況づけられた人間の展望としてしか与えられないように、歴史的状况に内属する人間に歴史の意味は展望としてしか与えられない。それゆえ、歴史の全体的意味が一挙に開示されることなどありえない。しかし知覚の展望性は必ずしも真理経験を不可能にするものではなく、むしろ誤謬の訂正ないし排除をつうじて漸進的な真理への接近を保証する。これと同じように、歴史的知覚においてもその展望性は歴史の全体的意味への接近を可能にする。しかしここで開示される歴史の論理とは、あらかじめ名指された目的へと出来事を至らしめる秩序ではありえない。逆に、歴史的経験それ自体のなかで、ある出来事を誤謬として排除していくことをつうじて、その方向性を次第に明らかにするものである。メルロ＝ポンティは、哲学の歴史的生成のうちに隠されたテロスを発見しようとしたフッサールの目的論的歴史考察を、このような歴史哲学のモデルとして読み解く。そして、フッサールが西欧諸学の歴史から析出した「理性的人間の完成」というテロスにかえて、社会的実存の歴史を貫く志向として「人間的共存」というテロスを取り出すのである。しかし、ここで「人間的共存」とはヘーゲル的な「普遍的相互承認」にほかならない。彼は、マルクス主義的歴史哲学をフッサールの目的論によって基礎づけることによって、そのヘーゲル的な独断論的を払拭しようと考えていたが、内容的にはいまだヘーゲルの歴史哲学の圏内にあったのである。

#### 5 プロレタリア的政治の展望

マルクス主義は、人間的問題として与えられた「現実の危機」のなかに、その危機の解決としての「人間的共存」の論理を読み取ることによって、歴史が無階級社会という特権的状態へと移行しつつあるという読解を提出する。かりにこのような読解が不可能であるとすれば、歴史には「共存の論理」もなく、歴史そのものもありえない。この意味で、マルクス主義は「一つの歴史哲学」のではなく「歴史哲学そのもの」であるとメルロ＝ポンティは主張する。そしてプロレタリアートこそ、この社会的実存の生成のうちに隠されたテロスの特権的担い手にほかならない。ここにおいてメルロ＝ポンティの歴史の目的論は、プロレタリア社会の実現のうちに人間性の諸問題の究極的解決を認める黙示録的歴史哲学へと移行する。しかし、メルロ＝ポンティの歴史哲学を支える理論的基盤である、知覚の意味と歴史の意味との間に設定された並行関係は、知覚と歴史のアナロジーを推し進めるほどに維持することが困難になる。結局、彼の歴史哲学は知覚の哲学を裏切っていると言わざるを得ない。さらに、プロレタリア階級と〈党〉との関係を身体と意識のアナロジーで捉えることによって、彼の歴

史哲学が、〈党〉を絶対化する論理を提出していることは否定しがたいのである。

## 第五章 歴史の現象学

本章の中心課題は、メルロ＝ポンティのウェーバー理解に示された政治哲学を明らかにすることである。そのために、彼のソシール言語学理解を前提とした上でウェーバー論を読解する。すなわち彼が提起した言語における表現と歴史の理論を、政治における実践と歴史の理論へと読み替えることを試みる。また、彼が言う「歴史的構想力」を「政治的判断力」に結びつけることによって、彼のウェーバー読解のなかに、決断主義を乗り越えてゆく真の政治的実存の誕生を見届ける。最後に、以上のような読解によって明らかになる、彼のマルクス主義批判の射程について論じる。

### 1 マルクス主義批判の位相

『弁証法の冒険』の哲学的モチーフを考える上で手掛かりとなるのは、『哲学をたたえて』(*Éloge de la philosophie*, 1953)において示された「哲学と歴史の統一」をめぐる問題である。ヘーゲルが提出したこの課題にマルクスが与えた解答が、その理論的難点ゆえに破綻せざるをえなかったことを、ここでメルロ＝ポンティは指摘している。その難点とは、マルクスが歴史の意味が人間の実践のうちに発生することを直観的に捉えていたにもかかわらず、それを記述する適切な方法をもっていなかったことである。かくしてマルクス主義歴史哲学は、事物の経過を外的利のごとく支配する歴史と、イデオロギーあるいは錯覚でしかない哲学との結合に帰結する。『弁証法の冒険』の冒頭に置かれたウェーバー論は、ウェーバーの歴史理論にマルクス主義歴史哲学のオルタナティブとなる歴史哲学を探る試みでもある。この試みは、ソシール言語学によって提示された新しい意味の理論を歴史の領域へと拡大することによって可能になるものであった。

### 2 言語・表現・歴史

メルロ＝ポンティは、ソシールの思想に新しい歴史哲学の着想を求めている。言語は、つねに新たな偶然的な表現を同化しながら一つの意味体系へとみずからを組織化する。それゆえ言語体系とは、潜在的な変化を内に含みながら歴史的に生成する体系である。言語におけるこうした体系性と歴史性との絶えざる交錯は、言語の歴史を理念的全体性とか必然的發展といった観念から解き放ち、言語の歴史の「受肉した論理」を思考可能にしている。メルロ＝ポンティは、このような歴史の論理の捉え方が、歴史一般に拡大しうることを強調する。歴史とは、人間が他者や自然ととりむすぶ関係とその組織化から生み出された意味が沈殿して「制度化」した地帯である。したがって、政治的・経済的・宗教的諸制度のみならずあらゆる共存の様式の制度化はシンボル体系として機能する。だとすれば、この意味は主体の活動を直接反映したり意識によって付与されるものではない。それ自体が意味をも

つわけではない歴史の個々の要素が他の要素との偶然的出会い、相互に一つの関係に組み込まれることによって、ある歴史の意味がそこに胚胎される。それは、隠されていた意味の顕在化でもないし、また人間が歴史に与える意味の完成でもない。それは意味の「到来」(avènement)と言うべきものである。しかし、過去の出来事の系列を「到来の歴史」へと変えるためには、過去が新たな表現のなかで捉え直される必要がある。歴史は、このような「捉え直し」(reprise)のうちに息づく「生きた歴史性」を引き継いでゆくことによって、可能になるのである。

### 3 歴史的選択の現象学

メルロ＝ポンティは、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』におけるウェーバーの考察を、「歴史的選択の現象学」として読み解く。カルヴィニズムにおける禁欲的で合理的な「生活態度」の選択は、技術・科学・法律といった諸領域における選択に会った結果、相互に支え合いながら一つの体系へと組織化され、ついには歴史の意味として同定されることになった。このようにして制度化された「合理化」は、人間と自然ないし歴史の所与の接点に現われる「象徴的母型」として、体系自身の内的倫理によってその構成要素の相互作用を組織しつづけるのである。歴史とはこのようなシンボル作用の場であり、歴史の究極的意味とか必然的發展を読み取ることは不可能である。ウェーバーの歴史理論は、過去の歴史的選択という経験に「問いかけ」ることによって、そこに到来する歴史の意味を理解しようとする試みである。それは、ヘーゲル的な歴史哲学のように歴史の全体的意味を一挙に開示しようとする傲慢な企みの対極に位置する。メルロ＝ポンティはこのような歴史への「問いかけ」がウェーバーの政治哲学にも組み込まれていると見ている。ウェーバーは、歴史の秘密を手中にしていると称する傲慢ではあるが英雄的な「理性の政治」と、歴史的展望を欠いてはいるが賢明な「悟性の政治」の狭間にあって、この二律背反を乗り越える政治を定式化しようとした。それを可能にするのは、過去に問いかけ歴史を生きる能力である「歴史的構想力」と現在に問いかけ歴史を生きる能力である「政治的判断力」なのである。「唯一の歴史的解決」などありえない歴史においては、政治的人間は、歴史の絶えざる問いかけの果てに一つの究極的選択に直面せざるをえない。ウェーバーは〈心情倫理〉と〈責任倫理〉のアンチノミーの極限において、政治を職業とする人間の生誕を描いた。ここにメルロ＝ポンティは、歴史的構想力と政治的判断力をそなえた主体が、みずからの歴史的責任を引き受ける断固とした決断によって一個の本来的な政治的実存へと受肉する瞬間を見出したのである。

### 4 マルクス主義の再検討

メルロ＝ポンティはルカーチの『歴史と階級意識』のなかで、マルクス主義が陥った歴史的独断論を自覚的に克服しようとする最良の試みを見つつ、彼自身のマルクス主義理解を評定しなおそうとし

ている。ルカーチは、歴史的事実を理解しようとする「知」とそれを現在に結び付けようとする「実践」の往還運動のなかに、歴史の意味を浮かび上がらせようとした。しかしこの歴史的展望は、新たに遭遇する出来事のなかでつねに見直されなければならない、それが誤謬と錯覚の可能性に開かれていることを率直に認めるかぎりにおいて、マルクス主義弁証法は独断論を免れているのである。しかしこのルカーチのマルクス主義は、レーニン主義の「新しい唯物論」によって押し潰される。メルロ＝ポンティはその理由を、マルクスもルカーチも、歴史の意味と弁証法を正しくシンボル作用の次元に位置づけることができなかったかゆえにであると指摘する。さらにマルクス主義の實在論の實踐的帰結であるボルシェヴィズムにおいて、〈党〉はプロレタリアートを代表する権力として、みずからを絶対的主体としてに確立するにいたるのである。ここにおいてメルロ＝ポンティが告発しているのは、弁証法的思考ではない。むしろ弁証法を完結させるという革命的思考であり、それは「政治の死」を意味する。マルクス主義弁証法の最大の難点は、「歴史の終末」という観念、そこにおいて人類が最終的に和解し普遍的承認が実現するというヘーゲル的観念の残滓を棄て去ることができなかったことなのである。

## 終章 政治と哲学

本章は、『シーニュ』序文における政治と哲学との連関をめぐる考察を敷衍して、メルロ＝ポンティにおける「政治哲学とは何か」を検討する試みである。その際、彼が描いたソクラテスとモンテーニュの肖像を参照する。この考察の結果、メルロ＝ポンティの政治哲学が、サルトルのそれとは異なる、もう一つの実存主義の政治哲学を素描していることが論じられる。

### 1 最後の政治論文

『シーニュ』序文で、メルロ＝ポンティは哲学と政治の分離という時代診断を下している。もはや歴史は哲学的誤解を必要とせず、哲学は政治に対して語るべき言葉をもたないようにならざるを得ない。メルロ＝ポンティがここで提出しているのは、このような時代にあつて哲学は政治についていかにして語りうるのか、という政治哲学的問題である。メルロ＝ポンティはそれに対して、哲学の必要性を認めつつも、もはや歴史の主人であるかのごとく尊大な語り口で政治について語ることはないとしている。問題は、哲学と政治との「距離を隔てた働きかけ」であり「差異を土台にした混合と混濁」である。

### 2 哲学者と公的生活

メルロ＝ポンティにおける政治と哲学の関係を考える上で素材となるのは、哲学的思考と政治的行動の交錯を、哲学者の公的生活を主題にして描いた二人の哲学者の肖像である。モンテーニュ論とソ

クラテス論に共通するモチーフは、いずれも市民としてのアンガジュマンと哲学者としてのデガジュマンという相反する要請の間に引き裂かれた不幸な生を描くことではなく、むしろアンガジュマンとデガジュマンの逆説的な結びつきをみずからの思考と行動のなかで生き抜いた幸福な生をたたえることにある。ここでメルロ＝ポンティは、このような哲学者の徳を、自己と他者に距離をとる能力であるイロニーに求めているのである。

### 3 哲学と政治の間で

哲学者の徳がイロニーであるとするれば、行動人たる政治的人間はこのようなイロニーから最も遠い存在であることになるだろう。しかしメルロ＝ポンティは、たとえ行動人といえどもアンガジュマンとデガジュマンの弁証法とは無縁ではないとしている。したがって行動人もまた「距離」をとることができなければならない。この能力は、彼のウェーバー読解のなかに「判断力」として指摘されたものである。さらに「判断力」は、「歴史的構想力」と結びつけられていた。判断力は、思考の傲慢と意志の恣意から選択と行動とを解放する。このようにメルロ＝ポンティの政治哲学が、最終的に構想力と判断力へと収斂し、それによって基礎づけられるものであるとするれば、政治哲学は、歴史への「問いかけ」によって「生きた歴史性」を宿す「表現としての政治」を可能にするものであることになるだろう。このような政治哲学は、思考と行動との隔たりをゼロとするような歴史の地点を指し示したり、その原理を提示するものではない。むしろその任務は、人間の条件に問いかけ、いかなる決定的な解決もない課題として人間の問題を繰り返し描くことである。サルトルの実存主義の帰結は、判断力なき意志としての「反抗」である。これに対して、メルロ＝ポンティは「いかなる諦めもなき徳能」(*vertu sans aucune résignation*)を薦める。ここにわれわれは、行動主義でもなくまた決断主義でもない、実存主義の政治哲学のもう一つの帰結を見るべきであろう。